

氏 名 (本 籍)	谷 口 智 子 (熊 本 県)
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	博 乙 第 1663 号
学位授与年月日	平成12年11月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審 査 研 究 科	哲学・思想研究科
学 位 論 文 題 目	新世界の悪魔 —植民地ペルーにおける文化接触の宗教学的考察—
主 査	筑波大学教授 P h . D . 荒 木 美智雄
副 査	筑波大学教授 博士 (文学) 棚 次 正 和
副 査	筑波大学講師 博士 (文学) 木 村 勝 彦
副 査	神戸大学教授 経済学博士 細 野 昭 雄

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、スペインのカトリシズムとペルー先住民の宗教という異なる宗教・文化間の接触状況における他者理解の問題を「新世界の悪魔」という宗教減少を通して考察しようとするものである。その際、本論文は、宗教現象を「理解」し、「解釈」することを主たる課題とする宗教学の方法に基づいて、以下の三つの枠組みを用いる。すなわち、第一に「エリートの宗教」と「民衆の宗教」、第二に、「宣言の宗教」と「顕現の宗教」、第三に「祖型と反復」である。

本論文は宗教学の立場から見た「新世界の悪魔」という名付の問題を、植民地主義における支配者と被支配者の間にある様々な面での力の落差から捉えることから始める。そこで、第一の枠組みとして「エリートの宗教」と「民衆の宗教」の概念を用いた。ここでいう「エリートの宗教」と「民衆の宗教」は、宗教学者チャールズ・ロングの視点に基づき、異なった宗教・文化が出会うことで突然生み出された植民地状況における宗教的対立・葛藤を指している。この状況において、解釈学を基盤にする宗教学がもっとも関心を払うのは他者理解の問題である。この問題の本質は、「新世界の悪魔」という名付とその減少の背後にある異宗教・異文化間の宗教に対する考え方の相違にある。それは宗教学の術語で言い換えれば、「聖なるもの」、「ヒエロファニー」に対する態度の相違である。

スペインのカトリシズムとアンデス先住民宗教の間には、ヒエロファニーに対する捉え方の決定的な相違がある。その違いを明らかにするために、本論文では第二の枠組みとして、宗教哲学者ポール・リクルの「宣言の宗教」と「顕現の宗教」の概念を用いた。「偶像崇拜」という言術（ディスコース）が出てくる背景には、「宣言の宗教」、すなわち、「言語（ロゴス）」を中心にする宗教と、「顕現の宗教」、すなわち、「自然」や「象徴」の聖性を重要視する宗教の間の対立・葛藤がある。「宣言の宗教」にとって「顕現の宗教」は「偶像崇拜」となる。しかし、「宣言の宗教」がまさに「偶像」もしくは「自然」、「物質」と呼ぶもの（例えば、石、山、大地など）に、「顕現の宗教」における究極的実証（リアリティ）が現れるのである。

第三の枠組みは「祖型と反復」である。「祖型と反復」はエリアーデの術語であり、一般的には神話と儀礼の関係を表現する術語である。アルカイックな社会においては、神話において語られた原初の神々の行為は、人間の社会で模倣・反復されるべき究極的かつ典型的モデル、すなわち「祖型」となる。アンデス先住民の伝統的宗教においてもその構造は当てはまる。神々や先祖という究極的実在が具現化したヒエロファニー（太陽、山、大地、

水、石など）はそれぞれ世界創造神話において重要な役割を果たすものとして記憶され、儀礼において繰り返し讃えられる。その構造は、ユダヤ・キリスト教の伝統においても同様に見られる。コロンブス以降の征服者たちの儀礼的振る舞いは、明らかにユダヤ・キリスト教の言述に基づいていた。彼らは先住民の神々を悪魔と断定し、その土地を占有しクリスチャンネームを名付けることによって悪魔払いと洗礼を施したのである。そこでは、儀礼（名付けと占有、土地の洗礼）によって反復される「祖型」としての宇宙創造のわががみられる。征服者たちは、神がカオスから宇宙を創造したように、未知の土地と人間と神々をカオス＝悪魔と見なし、それらに洗礼を施すことによって秩序化された新しいキリスト教世界をつくろうとした。その宗教的エートスこそが植民地支配を正当化したのである。

祖型とその反復は、言述と儀礼の両方の側面から、キリスト教のそのほかの事例においてもみられた。かつてユダヤ教がカナンの農耕宗教を「悪魔崇拜」と見なし迫害したように、近代初期のペルーの教会人たちは先住民宗教を迫害した。また、キリスト教がローマ帝国の宗教となる過程で異教徒を駆逐したように、グレゴリオ一世やアウグスティヌスを始めとする先人の様々な異教徒迫害の行為や言述は、アンデス先住民迫害の実際のモデルとなった。ここでは異なる宗教・文化の接触状況において、他者に対する双方の理解の仕方にも、それぞれの宗教の固有の価値や考え方のルーツとなるモデルがあり、それを「祖型」として模倣・反復し、歴史の新たな局面で展開していくさまを考察した。

以上の主題と三つの枠組みをもとに、本論文は三つの章によって文化接触の宗教的意味を考察しようとした。第一章では、ペルーにおける「偶像崇拜・魔術」撲滅巡察の歴史を概観した。17世紀にピークを迎えた偶像崇拜巡察はリマ大司教館とイエズス会が主導して大規模に行われた。その端緒は1609年のフランシスコ・アビラによるワロチリ地方の「隠れた異教の発見」である。ここにおいて、先住民宗教の改宗が実を結んでいないことが把握され、そのことに危機を感じたリマ大司教館は大規模な「偶像崇拜・魔術」撲滅巡察の制度化を目論んだ。その最盛期は第六代リマ大司教ビリャゴメスの時代であった。その時代には多くの巡察使が各地に送られ、大規模な「偶像崇拜・魔術」巡察とともに先住民宗教に対する膨大な破壊が行われた。第一章第一節では特に17世紀前半を中心に「偶像崇拜」撲滅巡察が行われた経緯を明確にした。第一章第二節では、「偶像崇拜」撲滅巡察と、先住民側の巡察に対する応答の事例として、1710年にリマで告発されたフアン・バスケスという民間治療師に関する記録を取り上げ、接触領域における宗教的創造の意味を考察した。

第二章では、「祖型と反復」の枠組みをもとに、支配者の宗教であるスペインのエリート・カトリシズムと被支配者の宗教であるアンデス先住民宗教の両者における「祖型と反復」の表れを比較した。

第三章では、ポスト植民地状況における現代アンデスの神話伝承において、先住民の立場から「偶像」＝「悪魔」がどのように語られてきたかを考察した。スペインのエリート・カトリシズムの立場から先住民とその神々に与えられた「悪魔」という名付に対し、先住民側の対応は三つに分けられうる。第一に自らの先祖や神々を「悪魔」と見なしてカトリックに改宗するという受容の態度（第三章第一節マチュ）、第二に西欧の植民地主義と西欧人と逆に「悪魔」と名付ける批判的態度（第三章第三節ビシュタコ）、第三に、自らの神々に「悪魔」と名付けるばかりでなく、「悪魔」の意味をポジティブなものに変えてしまう新しい創造（第三章第二節ティオ）である。いずれの態度もその根本には、先住民の宗教的オリエンタチオ（方向付け）があった。本論文はオリエンタチオの変更を他者によって強いられたネガティブな宗教的生とその象徴（具体的には現代の神話で「悪魔」として位置づけられる先住民の神々、先祖、祭司）のなかには、そのネガティブな枠組みを生存のための戦略として自らの世界認識のうちに捉え直そうとする民衆宗教の創造性を見いだすことが出来るとしている。

異文化接触と宗教弾圧・迫害によって表出した「新世界の悪魔」という現象を、単にネガティブなものだけでなく、両者の対立・葛藤とディアレクティックの結果として立ち現れてくる豊かなシンボリズムとみなし、それを宗教現象として正当に評価したことが、本論文の中心的意義である。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

論文のタイトルが示しているように、本論文は、植民地としてのペルーにおいて、先住民とスペイン人との二つの異なる文化、宗教の接触並びに他者理解の問題を、「悪魔」と呼ばれる現象を中心に、宗教学の方法を用いて探求している。

方法論的枠組として、エリートと民衆の宗教、宣言の宗教と顕現の宗教、および祖型と反復という三つの枠組を立て、それらの枠組を駆使してスペイン人がもたらしたカトリシズムと先住民の宗教との接触と対立、およびそこから生まれる新しい宗教的意味世界を構造的に明らかにしており、異文化接触の問題全体を考える上でも宗教的意味世界の創造のプロセスを考察する上でも、すぐれて示唆に富んだ論考である。

しかし、問題点がないわけではない。とりわけ、スペイン人によってもたらされたカトリシズムの理解に関して、一面的・図式的な理解に留まっており、そのため、民衆の世界にカトリックが浸透していく複雑なプロセスにおける多様な対立を十分に扱っていない。一時的な資料をもっと有効に活用すれば、より説得力が増したはずである。また、文化接触の問題が宗教だけに限定されているきらいがあり、政治・経済を含めたより広い枠組に展開されれば、より深い問題が浮かび上がってくるであろう。さらに、文化接触は新世界だけでなく西欧にも変化をもたらしたのであり、そのことの意味にも統合的に取り組むことが望まれる。

以上のような問題点があるとはいえ、文化接触においてもたらされる対立・葛藤とダイアレクティックをめぐる実存的な状況を宗教学的に掘り下げ、新しい視点を開拓したことは高い評価に値する。学界への寄与は大であり、学位論文としての価値も十分認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。